

「長崎と中国、孫文を中心に」

中国清華大学日本研究中心教授 李 廷江
日本中央大学教授

1. はじめに

こんにちは。本日は、こういう所でお話しできることを大変うれしく思います。実は今年、孫文生誕150周年に当たります。孫文研究者として、また清華大学日本研究センターとして、長崎大学多文化社会学部と本日の会を共催できましたことを大変光栄に思います。

ところで、先ほどの入江先生と平野先生の貴重なお話を伺いまして、大変勉強になりました。私自身は日本に来て34年になりました。本日、こういう形で仕事をできますことも、私の大学院時代からの指導教授、平野先生のご指導のおかげであり、また長い付き合いをいただいております入江先生のご指導のおかげであります。

私は、つい先日、出張から帰ってきたばかりで、まだ時差ぼけもあり、両先生のあとに話をするのは大変緊張しております。

私は、長崎は初めてです。恥ずかしながら、長崎と中国についての知識はあまり持っておりません。孫文と長崎との接点は多少知っておりますけれども、お話できるほどのことを準備できておりません。誠に恐縮でございますが、大変不安で、どのようになるか恐れております。

先生からお話を伺いまして、改めて歴史認識が非常に大切であることを考えました。時代認識と歴史認識をどのように我々が勉強して、社会と人生に関わっていくのか。多分、一生かかってもわからないこともあるでしょう。

長崎と中国を考えたとき、また孫文を通して長崎と中国を考えたとき、私は非常に大きな意味があると理解しています。長崎と孫文は日中関係史の一部であり、また孫文と長崎との関係は、日中関係の非常に重要な部分を反映したものと理解しています。

本日は、最初に少し時代をさかのぼって、二つの側面からお話を進めていきたいと思います。本日のキーワードである歴史から、日中関係における中国と長崎はどのようなものか、ごく簡単に私が整理したものを皆さんにご報告したいと思います。

2. 日中関係における中国と長崎

まず、中国の宋時代の詩を引用して、今日の話を進めていきます。これは多分ご存じの方も多いかと思います。

横より看れば嶺を成し、側よりすれば峰を成す
遠近、高低、各同じからず
廬山の真面目を識らざるは
只身の此の山中に在るに縁る（「西林の壁に題す」）

つまり、人の意識や立場が違うならば、決して同じものでも同じようには見えない。先ほどのご講演で先生がおっしゃるように、歴史は一つであっても、一つ以上のものとして皆さんが見ているのが現実です。

長崎と中国の関係を考えると、次のように理解しています。確かに百数十年前の歴史ではありますが、孫文自身が日中関係史の真髄を検証したからこそ、彼と日本との関係ができたのであり、また孫文が残した遺産も、現代を生きる我々にとって非常に貴重な思想があります。それゆえ、我々は常に歴史を勉強しなければならぬと考えるわけです。

私は、日本の外交史料館を通して、長崎の明治初期における日中関係を少し調べてきました。資料は膨大で3万点を越えましたが、私はタイトルを通じて、約6,000点の関係資料を調べました。

まず、長崎は日本の近代化に大きな貢献をしました。

一つには、明治日本、海外開放の玄関口として長崎が存在する。資料を一々ご紹介することはできませんが、このようなことがほとんどの資料に出てくるわけであり、この資料には、当時の日本政府の印章、印鑑があり、大変重要なものであることが分かります。

二つ目は、明治日本指導者の揺り籠としての長崎の存在を指摘できます。実際、明治日本で大きな役割を果たした人々が、何らかの形で長崎に滞在して仕事をし、彼らが対外関係において重要な立場にあったことは事実です。

三つ目が、まさに多文化社会学部と関連していますが、明治日本の文化交流の最先端として長崎があることを指摘したいと思います。

当時の日本には三つの港があります。三つの中には必ず長崎があります。当時は「長崎」の字が、「山」の下に奇怪の「奇」で「長壽」でした。その後、日本の各地で港が開放された後も、長崎は常に重要な位置を占めていました。資料を

ご紹介すれば非常に面白くなりますけれども、本日は時間的な余裕がありません。

明治初期の対外関係の中で、特に日中関係の中にある長崎と中国は一体どのような事例があるかを、ここで若干ご紹介したいと思います。現在と非常に関連しているところもあれば、全く関連しないところもあります。よく考えてみれば、当時の問題だけとしてではなく、むしろ明治初期よりはるか昔からあった問題の継続的な一面を持っているのではないかと思います。

ここではいろいろな問題がありました。アヘンの問題もあったし、子どもの売買の問題もありました。さらに、温泉へ行くのも許可がないと行けない。国際結婚の問題もあり、結婚、離婚、養子、帰化、賭博の問題など、いろいろな問題がありました。

これらの問題以外に、政治問題が少なくとも二つあります。長崎清国水兵事件は、日清戦争の原因となったと言われています。それから1958年の長崎国旗事件の背景には、国民党が存在しました。その後、日中関係が非常に悪化したのも、この長崎で発生した事件でした。いろいろなつながりがあって、いろいろな結果があつての長崎であることを、ここで指摘しておきたいと思います。

歴史をどう見るか。これは大学図書館で借りた本ですが、四つの章からなる、福建省と長崎県との交流を記念する本です。ここでは、文化治初期のものとを比較すれば、歴史は一体どういうものか非常に分からなくなるところもあります。

3. 長崎と孫文

孫文と長崎との関係を考えてみたいと思います。孫文自身は300年以上、あるいはもっと長い目で、日中関係を見てきたのではないのでしょうか。

これは昨晚撮った写真です。中国とゆかりのある長崎には、鄭成功がいたこと、出島があつたこと、昨晚、我々が招待されて大きな感銘を受けましたが興福寺があることなども重要な点です。出島は現代中国と非常に密接な関係があります。1979年、中国の改革開放の際、どのようにすればいいのか。大来佐武郎元外務大臣から、当時中国の谷牧副総理に、出島の例が紹介されました。それがまさに、その後の経済特区の話につながったわけです。長崎は現代中国に大きな貢献とつながりを持っていたことをぜひ知っていただきたい。

孫文の革命と長崎は、一体どのような関係であつたのか。孫文が最初に日本に来たときに、新聞では、革命の孫文が来たというような報道がありました。ここから、孫文は自分の党を「革命」(中華革命党)と名付けました。革命の由来はここから来ています。

孫文の名前は、もともと孫逸仙で、決して孫中山ではありません。ご存知のとおり、日比谷公園辺りで中山邸を見て、自分に中山という名前を付けたわけです。また、最後の奥さんの宋慶齡とは、日本で出会って結婚しました。やはり日本とつながりがあったからではないかと思います。

日本との関係がなければ、孫文の革命は成功しなかったと言えるでしょう。孫文は革命家生涯40年のうち、日本で10年以上生活していました。日本を拠点にして、中国で武装蜂起を指揮したり、日本で留学生を指揮したりして、清朝と戦いました。また、日本の友人をたくさん得て、日本の援助があったことで孫文の革命が成功しました。

孫文と長崎ですが、もちろん、まず挙げなければならないのは、梅屋庄吉のことです。多分、長崎ではほとんど知らない人はいないぐらいの方です。孫文の支援者として、最初に会った日本人の一人として知られております。これは当時の写真です。それから、こちらの中山家、分家ですけれども、孫文の名前が付けられて、その後、孫文を助けました。長崎には、孫文の銅像を立てた人もいます。孫文と梅屋庄吉との出会いは省略いたしますけれども、要は人間の約束はいかに命をもって守るかです。ただ、そこには何かのつながりがないと、そのようにはできません。長崎出身の梅屋庄吉は、孫文の理念に感銘し、「あなたが仕事をすれば、私は協力する」と、そのような約束をしたのです。

孫文と長崎に関することは、横山宏章先生がたくさんの本を書かれています。私の関心は、孫文の10年以上にわたる日本での生活の中で、長崎にどのくらい滞在したのか、長崎に何回来たのかという問題ではなくて、むしろ、彼の革命人生の中で長崎がどのように関連しているのかにあります。そこで、孫文の日本に関する言動の中で、長崎からどのような影響を受けたのかを調べてみました。

孫文は、東京、横浜、神戸、長崎に滞在しましたが、彼の生涯において、県民性について語ったのは長崎だけであります。孫文は、日本訪問の際は最初に長崎に来ましたし、長崎を経由して中国に戻ったのも、彼の長崎に対する思い、気持ちの表れではないかと思います。では、その熱い思い入れ、彼の内面に何があったのか、私はこのように整理しております。1897年の最初の長崎訪問から、1924年11月までの間に合計9回の訪問をしています。これは三つの時期に分けてみることができると思います。

第1の時期は、孫文の日本認識、日本イメージの形成期に当たると思います。孫文の10年以上にわたる日本生活について、残された史料はあまりありません。日本で革命を準備し、失敗の連続の日々でありました。ですから、彼としては、日本政府に対して非常に複雑な気持ちを持っておりました。あまり語っておりま

せん。

第2の時期は、孫文の日本期待論が非常に出てくる時期であります。1911年の辛亥革命勃発後、1912年1月10日、辛亥革命成立後、孫文としては革命が一応成功し、中華民国をつくったこともありますし、その革命成功の総括をするときに、孫文が日本の存在を強く意識したものだと思います。孫文自身としては、日本の協力を得て大きな仕事をしようという考えもあったわけです。ですから、第2期はまさに、孫文の日本イメージの変容時期に当たる。1913年の来日について、すべての資料を私は一応全部見ましたけれども、ほとんど日本期待論に満ちた発言でありました。それはリップサービスもあるでしょうし、率直に彼の気持ちを表したのもでもあります。

その後、約10年以上、孫文の来日はありませんでした。最後の訪日は、1924年11月23日でした。それは有名な「大アジア主義」を発表した訪日であり、孫文の日本に対する記念碑的な論文とも言えるものであります。

4. 展望

この三つの時期をもう1度整理します。

第1期、長崎訪問は孫文にとって、日本認識の原点であると私は思います。第2期については、孫文の日本認識の変容の時期に当たります。滞在期間がわずか数日ということもありますが、いろいろな面で積極的な発言がみられます。孫文の演説「世界の平和と基督教」をみて私は改めて感心しました。この長崎の青年会館で孫文が話をしたわけです。

それから、孫文の全集の中で、鄭成功の名前はそれほど多くは出てきませんが、長崎に対するイメージのなかには鄭成功が確かに存在します。長崎に生まれた鄭成功、母親は日本人で長崎の平戸の人であります。彼は文教思想の根本において、日本と中国の関係は特異なものであると認識しています。これは1897年、熊本訪問から長崎へ来たときの認識からきているものだと思います。日本生まれての鄭成功が日本を拠点にして清朝に抵抗した以上に、自分も拠点にして清朝と戦うことができるのではないか。そのような感慨があったのだと思います。孫文にとって鄭成功がどの程度の重みを持っているのか。やっと分かってきたような気が致します。その時の熱烈な歓迎については、孫文がマスコミに十分語っています。もう300年前のを持ち出して、日中関係は東アジアのことを視野に入れて考えるべきであると、孫文は考えたわけであります。

ここで特に面白いのは、彼は国民党交通部、日本から帰国した直後に内輪で、

つまり中国人の前で、日本についてこのように語りました。6年間日本にいなかったから日本のことは知らないけれども、しかし、実際に行ってみると、日本人が自分に対して同情ではなく、むしろ非常に支持をしてくれた。大アジア主義を抱いていた。その時に、私は大アジア主義のことを考えたのだと。

それは、桂太郎との密談があったからではないかと私は思います。その後、彼の日本認識の基本思想の重要な部分となったわけです。これは非常に重要です。つまり、領事館華僑晩餐会における演説にもありますが、彼はヨーロッパもアメリカも知っている。しかし、日本こそ、これからの中国の命運をとともに分かち合っている国だと。歴史的に中国人は日本を誤解しているということを彼が指摘したことも、非常に重要であります。

第3期のことに若干触れます。1924年の大アジア主義の演説は、決してその時に初めて出てきた思想ではありません。既に十数年以上に渡って、彼は中国と日本との関係を考えるときのキーワードに据えていました。自分にとって最後の訪日である以上、言いたいことを整理して言ってきた、それは彼の日中関係の理論の中核になったと、私は指摘したいと思います。

彼はグローバルな人間です。世界的な視野で日中関係を考えていたことは、彼のロンドン滞在時代から最初の訪日にかけての資料を見れば、よく分かります。世界の中の日中関係の位置付けを、彼はずっと思っていたわけです。

それから、彼の明治維新についての認識は、中国にとって参照すべきサンプルであったということです。我々は今、30年前の明治維新をやっているだけの話です。中国にとっては非常にありがたい話であり、また彼は終生、生涯において、このように見ていたわけです。

彼の思想変化も、彼の記す文字によく表れています。人から頼まれれば喜んで書いていましたが、そこに現れる変化も、孫文の気持ちの変化そのものを表したものであります。そして最後には、世界平和に至ったわけです。

結びとして申し上げたい。一つは、孫文と長崎との関係は、確かに孫文と日本との関係の一部にすぎないけれども、しかしそこには、孫文と長崎との関係の本質を反映している。それゆえ、長崎における孫文の言動と彼の日本認識は、より広義の視点から見べきであるということです。

もう一つ、孫文と長崎との関係を、孫文の中国革命認識の視点で見るときに非常に重要なことは、彼は歴史的な視点と現実的なテーマとを一体として、非常にうまく捉えていることです。つまり、日本と中国は東アジアにおける二つの大国として、地域の安定と発展、また世界平和の維持に対して、自覚と責任をいかに認識するのかが非常に重要であると認識しています。現在の我々にとってたいへ

ん重要なメッセージであります。

私は、孫文の日中関係論として、二つのことを指摘したいと思います。孫文の思想は、常に世界的な流れの中にあって次第に形成され構築されたものです。日中両国の具体的な政治状況に即して、目下の政治追求よりも、むしろ両国関係の思想的な連帯根拠を思考しながら、その内面的なことを明確に自覚し追求しました。孫文指導の集大成がここにあります。ここには、時代的なアピールとともに、時代を超える精神的な意味があることを、我々は勉強しなければなりません。それゆえ、孫文の日中関係の理論の根底には、彼の普遍主義的な意識と能力並びに歴史洞察と時代への展望があります。高いレベルにおいて創造をおこなってきた、まさしく傑作であると言わなければなりません。

それゆえ、孫文において、民主主義に基づいた日本と中国の連携は、アジア地域の協力からスタートして、最終的には人類の発展を導いていく、より崇高な目標を満たす理念に満たされており、伝統と現代、東洋と西洋、戦略と戦術を見事に調和して引き継いでいく普遍性を持つものであると私は思うわけであります。

そういう意味で、「つながりの関係」、すなわち孫文については、長崎との関係を再整理することを通じて、翻って、孫文についての再認識に達することができました。こうしたことに、今回、大きな幸せを感じたわけです。そういう意味でも、このことは平野先生、入江先生のご指導のおかげでありますし、今回の機会をくださったことにも改めて感謝いたします。どうもありがとうございました。

【質疑応答】

寺前建佑（多文化社会学部3年）

入江先生の講演を貫かれていたキーワードは「つながり」でした。歴史・記憶は人類にとって一つしかない。国民である前に我々は皆同じ人間なのだという、人類が一つであるという「つながり」の確認が重要であると。確かにみんな同じ人間という側面もあると思いますが、一方では、同じ「つながり」を持っているとか、同じ人間であるという共通意識こそが、我々を苦しめる面もあります。その共通意識は、一方では私たちを他の集団や共同体と異化する側面と、他方ではそれを同化する、二つの側面を持つと思います。異化するときは、一人一人違うのだ、多様性を大切にしようという方向性があると思います。同化するときは、みんな同じ人間なのだから、そういう「つながり」とか、共通意識とか、共属意識をもっと見いだすという方向があると思う。この同化と異化のせめぎ合い、あ

るいは共同性と個性のせめぎ合いこそが私たちがすごく悩ませたり、葛藤させたりする。ここの部分についてどのように考えたらいいのでしょうか。

福山詢 (多文化社会学部1年)

平野先生にご質問です。カントの交易から、国際交流から平和につながっていくというのを聞いて思ったのですが、交易から国際交流までの段階の間に、国際間の利益とか利害関係が作用して、平和というより戦争に進むようなことが、歴史の流れの中で多々あると思う。そういうパターンに入った場合として、国際体制という、さっきカントのピラミッドみたいな形のあそこの一部、あの層の上でできるようなことというのは何があるのでしょうか。

上村威 (多文化社会学部1年)

三方に質問です。タイトルの「記憶の共同体を目指して」について、国家は自分の国益、そして自国にいいように働き掛けると思う。両親が中国人であるために、僕も中国で生まれました。中国に帰ると、政治の問題とか尖閣諸島とかの問題になります。僕の親戚も、「尖閣諸島は中国の領土だ」みたいな発言をします。領土問題の焦点が自分の国だと言うと思う。そこに歴史認識の違いが生まれていると思う。記憶の共同体は本当にできるのか。それをつくるためには、どのようにすればいいのか。

入江昭先生

今の三つの質問は、平野さんも李廷江さんも私も大事だと思いました。一生かかって研究を続けて、資料を見たりして、それでもまだすべて解決された問題ではないと思う。これから皆さんも、悩んでいかなければならない問題だと思います。

その問題は結局、世界の中の人たちの多様性、多文化です。人間は世界に何十億人かいるとすれば、その人たちが一応、一人一人違っているわけでしょう。全く同じような人間というのはどこにもいない。それぞれ違う。それと同時に、共通する人間性というものを持っている、オバマの言う〈common humanity〉。だから、共通する人間というものと、それぞれの個性を持った人間というものを、どのようにうまく絡め合わせていくかということじゃないですか。

共通するということを強調しておきます。そこに出てくるものは、下手をすると、人間はみんな同じようなものになる。いわゆる、すべての人間を同じような方向に持っていこうとするのもよくない。かつては、皆さんもちろんご承知のよ

うに、1930年代のナチスのように、人間をみんな同じようなものにしようと。ドイツ人をみんな同じようなドイツ人にしてしまう。そこで、同じでない者を差別待遇したり、虐殺したりする、すさまじいものがある。

人間の共通性だけを強調することは間違っていると思うし、かといって、すべての人間は違うということばかりを強調していくと、今度はその間に何も共通するものがない。つまり、それぞれ別個の人間が一緒の世界に住んでいると、どうしてもいざこざにならざるを得ないでしょう。これは常識的ではあるけれども、その両方を考えて、多様性と共通性というものをうまく具合に絡め合わせながら、すべての人たちがお互いに共存、つながり合っていきましょうと、やはり「つながり」に戻らなければならないのです。「つながり」が一番大事だろう。これから若い人たちは、世界中の人たちとつながり合いながら、共通性もあるし多様性もある。それが人類の形だということで、そこから始まってほしい。

先ほど平野先生がおっしゃったけれども、いわゆる「混血」という言葉が出ましたね。日本で会ったいろいろな人たちの結婚で生まれたのが混血である。混血児という言葉は非常にいいこと。これからはみんな混血状態になっていく。いろいろな意味で我々も、すべての人間がこれからインターネットなどで、世界中からいろいろなものを取り寄せる、考えを取り寄せる。そうすると、純粋なものはどこにもないわけだから、混ざり合っていく。我々はみんな、思想的には混血な状態であるわけです。それでいいのだと思う。混血ということを理解した上で、どのようにして共存共栄でやっていくのかということだと思う。

僕の考えでいえば、国家と国家のレベルではなく、個人レベルでお互いに絡み合っていく、あるいはいろいろなものを考えていくことになると思うのです。

恐らく、これからの我々の人生にとっては、あるいは皆さんの人生にとって、国というものの存在の相対的な影響力や力は減っていくと思います。だから、ますます国に頼ることはできない。個人の力でやっていかなければならない。

個人の力といっても、それは決して個人個人が別個ではなくて、女性の間とか男性の間とか、あるいは同じような考えを持った人たちの間とか、いろいろな意味で同じように共有をしながら、しかも人類全体の多様性をわきまえた上で、何とかより平和的な世界をつくっていかう。そのように考えていきますと、領土問題はほとんど取るに足らないような小さなもの。領土問題でいがみ合うというのは、国家を中心としているからでしょう。国家という相対的な影響力を減らしていけば、この小さな岩はあなたの国のものだというのは全く問題にならないですよ。みんな好き勝手にそこに住んでやればいい。

だから、領土問題とか、安全保障問題とか、これらの世界では、僕はそれほど

大事な問題ではないと思う。むしろ人間同士の共存共栄だと思う。それらの方向に世界はなっていくでしょう。

ですから皆さんも、国にとらわれないで、むしろ国以外のアイデンティティー、年齢とか、男女別とか、健康状態とか、宗教でもいいですし、人種でも何でもいい。それらのものを中心にして、お互いに世界の国の人たちとも交わって行っていただきたいという気がします。

平野健一郎先生

福山さんのご質問は、私に直接、しかもかなり具体的な形で向けられています。しかし、福山さんのご質問だけではなく、最初の寺前さん、それから3番目の上村さんのご質問も、3人共通に向けられていると受け取ります。

福山さんのご質問に関しては、私のスライドの最後で、ちらっとだけお見せした3層構造を取り上げていただいて、しかも、きちんと理解してくださった上で、質問してくださったことにお礼を申し上げたいと思います。その上で、三人の質問ないしはコメントに、私なりに答えるとする、そこにいくつか共通のポイントが認められますので、それについて私の考えを申し上げる形でお答えにしたいと思います。

入江先生が、お話の最初に、1934年生まれの個人としての記憶をお話になったのが大変印象的でした。私は、入江先生から3年ほどあとに生まれた人間ですので、入江先生ほど強烈にはないのですが、やはり小さいころのことを思い出しております。振り返ってみると、それが私を国際関係の勉強に向かわせたものだと思っております。それは常日ごろ思っていることでもあります。

それを今の三人のコメントないしはご質問に重ねて言い換えますと、歴史認識はやはり時代とともに変わることは否定できないと思っています。寺前さんが、「人々の共通意識こそが人を苦しめることがあるのではないか」とおっしゃったあとに、ちらっと「同化」という言葉が使われました。

私は、国際関係論の勉強をし始めて、教壇に立つようになってからも、かなりの期間、人々の同化をベースにした国民統合という問題が国際関係の中心課題だと思って勉強を続けたり、講義をしたりしておりました。それがいつの頃か、寺前さんが今、到達しておられる感想と似たようなところに到達するようになりました。

それは、時代が20世紀から21世紀に移って行って、日々の新聞、テレビなどの報道を見て、世界各地で起こっていることを感じた上で、考え方が大きく変わることがあったのだと思います。そこから多少理論的な格闘をして、基本的に文化

は人が生きるために必要とするものですので、時代や環境によって、それぞれの集団の人々に特有の特徴を持つことになる、これは否定できないということをまず一つの前提にした上で、文化と文化の関係や、文化の変容ということを考えることになりました。

もう一つ、日本語の語彙から今日、重要と考えられることばを取り出してお話すると、多様性と共通性の関係、あるいは多様性と共通性の間の格闘だと思えます。簡単にいいますと、理念の上でのその格闘について私なりの模索をして、現在、到達しているのが3層構造の理解です。それぞれのレベルに文化の共通性と多様性があります。一つ下のレベルで、多様なあまりに諍いが起こるとか、あるいは共通性を求めすぎるあまりに諍いが起こることは否定できないのですが、やはり円錐形全体の安定のためになんとか解決するのがよいとすれば、一つ下のレベルで諍いが起こるのを、それぞれのレベルの人々が自覚して、一つ上のレベルで共通性を求める、そういう努力でなんとか和らげていくことが、具体性を持った解決の方向につながるのではないかと。そういう考え方です。

そういう考え方で、カントを読み直してみますと、カントには、まさにその3層構造を理論的な骨組みにする論理があったことに気がついて、これだと思っているというのが、今の私の世界認識であり、歴史認識であると思えます。

元に戻りますと、歴史認識、世界認識はやはり、われわれが今生きているこの時代の時代相といいますか、あるいは、それによって大きく変わりつつある時代認識の如何によると思えます。すべての層で紛争は相変わらず続いておりますけれども、それを解決する努力をしながら、新しい時代認識をプラスの歴史認識、世界認識の方向に強めていく以外にないのではないかと思います。

補足ですが、福山さんが、私がカントを引用した3段論法について、「交易から国際交流が生まれ、それが平和にという3段論法を逆に使うことも可能ではないか」とおっしゃったのは、そのとおりだと思います。が、まずはその3段論法を平和の方向に使っていくように、われわれが努力を続けるということがなければならぬのではないかな、と思えます。

まだ、お答えは足りないのですが、時間の都合もありますので、以上で一応のお答えにしたいと思います。

李廷江先生

私は、実は60歳になったけれども、中国では文化大革命を経験したわけです。それから中国自身も、1949年、新中国ができてからいろいろなことがありました。

それで思い出したのが、中国共産党の元帥、軍人トップの1人が、新中国がで

きてからは戦争の映画などは一切見ないと。彼いわく、戦争の映画を見ると昔を思い出す。たくさんのお母さんから、息子を返してくださいという夢を見るし、たくさん若い女性から、旦那さんを返してくださいという夢を見るのです。当時、国境の戦争ですから、劇とはいえ、人間である、同朋である、同じ中国人同士の戦いです。

さらに深めると、国籍が違って、敵もやはり人間であることに変わりはない。結局、文革のときには同じ家族であっても、考え方が違うと、相手を罵倒するどころか、死んでもらうことさえあった。

今日の話でも、命の尊重でしょう。それから、国家より個人の存在をいかに認めるかの問題であります。領土問題もあるでしょうけれども、それよりもっと大切なものがほかにあるのではないか。平和をどのように、どこまで考えるかの問題が基本ではないか。世界公民というカントの定義もあるけれども、本当に世界平和から出てきた世界公民ではないかと私は理解しています。